

御国の権威を行使するメシア・イエシュア (5)

【聖書箇所】 マタイの福音書 8章 28～34 節

ベレーシート

●御国の権威を行使するイエシュアの奇蹟を学び始めています。ツアラアトのきよめ(8:1～4)、百人隊長のしもべで中風やみの癒やし(8:5～13)、ペテロの姑の熱病の癒やし(8:14～15)、自然界において(8:23～27)、そして今回は、悪霊につかれた人々の癒やし(8:28～34)において、イエシュアの権威が現されています。福音書では意外と「悪霊につかれた人」の記述が多いのです。

●イエシュアはある人たちから悪霊を追い出されました。福音書のいやしの記事の中では半分くらいの数に上っています。イエシュアは悪霊に対して絶対的な権威を持っていることを明らかにされました。とりわけ、マタイの福音書が記している箇所だけを挙げてみましょう。

①【新改訳 2017】 マタイ 4章 24 節

イエスの評判はシリア全域に広まった。それで人々は様々な病や痛みを苦しむ人、**悪霊につかれた人**、てんかんの人、中風の人など病人たちをみな、みもとに連れて来た。イエスは彼らを癒やされた。

②【新改訳 2017】 マタイ 8章 16 節

夕方になると、人々は**悪霊につかれた人**を、大勢みもとに連れて来た。イエスはことばをもって**悪霊どもを追い出し**、病気の人々をみな癒やされた。

③【新改訳 2017】 マタイ 8章 28 節

さて、イエスが向こう岸のガダラ人の地にお着きになると、**悪霊につかれた人が二人、墓場から出て来て**イエスを迎えた。彼らはひどく狂暴で、だれもその道を通れないほどであった。

④【新改訳 2017】 マタイ 9章 32 節

その人たちが出て行くと、見よ、人々はイエスのもとに、**悪霊につかれて口のきけない人**を連れて来た。

⑤【新改訳 2017】 マタイ 12章 22 節

そのとき、**悪霊につかれて目が見えず、口もきけない人**が連れて来られた。イエスが癒やされたので、その人はものを言い、目も見えるようになった。

⑥【新改訳 2017】 マタイ 15章 22 節

すると見よ。その地方のカナン人の女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ。私をあわれんでください。**娘が悪霊につかれて、ひどく苦しんでいます**」と言って叫び続けた。

●①～⑥で一見して分かることは、③を除くすべてが、人々がイエシュアのもとに「悪霊につかれた人」を連れて来たということです。③だけが「悪霊につかれた人」がイエシュアを迎えたとあります。

●「悪霊」のことをギリシア語で「ダイモニオン」(δαίμωνιον)、複数形では「ダイモニオン」

2. 悪霊

(δαίμονίων)といます。一文字異なるだけです。新約聖書に記されている「悪霊」はその多くが複数形で使われます。ヘブル語では「シェード」(טִשׁ)の複数形「シェーディーム」(דִּשְׁיִים)です。「悪霊につかれる」ことをギリシア語で「ダイモニゾマイ」(δαμονίζομαι)といますが、それは悪魔の支配の下にあって、しかもそのような人は肉体的または精神的に重篤な病気（麻痺、失明、難聴、発話の喪失、癲癇^{てんかん}、憂鬱、狂暴など）で苦しんでいることを言います。

- さて、今日のテキストを読んでみたいと思います。

【新改訳 2017】マタイの福音書 8 章 28～34 節

- 28 さて、イエスが向こう岸のガダラ人の地にお着きになると、悪霊につかれた人が二人、墓場から出て来てイエスを迎えた。彼らはひどく狂暴で、だれもその道を通れないほどであった。
- 29 すると見よ、彼らが叫んだ。「神の子よ、私たちと何の関係があるのですか。まだその時ではないのに、もう私たちを苦しめに来たのですか。」
- 30 そこから離れたところに、多くの豚の群れが飼われていた。
- 31 悪霊どもはイエスに懇願して、「私たちを追い出そうとされるのでしたら、豚の群れの中に送ってください」と言った。
- 32 イエスは彼らに「行け」と言われた。それで、悪霊どもは出て行って豚に入った。すると見よ、その群れ全体が崖を下って湖になだれ込み、水におぼれて死んだ。
- 33 飼っていた人たちは逃げ出して町に行き、悪霊につかれていた人たちのことなどを残らず知らせた。
- 34 すると見よ、町中の人々がイエスに会いに出て来た。そして、イエスを見ると、その地方から立ち去ってほしいと懇願した。

1. 文脈—「向こう岸のガダラ人の地」

●マタイ 8 章 28 節で、イエシュアと弟子たちがカペナウムから「向こう岸のガダラ人の地」に着かれたことが記されています。18 節にはすでに「弟子たちに向こう岸に渡るように命じられ」ていますが、19 節では、一人の律法学者と別の一人の弟子がイエシュアのもとに来て、「従う」ことの間答が記されています(19～22 節)。その後、イエシュアと弟子たちが舟に乗って「向こう岸」へ渡り始めますが、湖は大荒れとなってしまいます。イエシュアがその嵐と湖を叱りつけると、すっかり凪になった出来事が記され(23～27 節)、その後、イエシュアの一行が湖の「向こう岸のガダラ人の地」に着かれた事が記されています。マルコとルカの福音書では「ゲラサ人の地」となっています(マルコ 5:1、ルカ 8:26)。マタイ 9 章 1 節にはイエシュアは「舟に乗って湖を渡り、自分の町に帰られた」とあります。つまりこれはイエシュアが宣教の本拠地へ戻られたということです。なぜイエシュアは舟で「向こう岸のガダラ人の地」へ行かれたのでしょうか。前回にもお話ししたように、「ガダラ人の地」とは「異邦人の地」のことです。イエシュアはこの地を通して「デカポリス」などの異邦の地に行っているのです。

2. 悪霊につかれた人

●地図を見ると、デカポリス地方に「ガダラ」とか「ゲラサ」という地名があります。しかしそこに行かれたわけではありません。なぜならイエシュアの一行は舟から上がられると「すぐに」(マルコ)、「悪霊につかれた」人と出会っているからです。最近の考古学によれば、ガリラヤ湖の「向こう側」といわれる地の山の上には、ローマ軍の駐屯地があり、ローマの偶像の神殿がある巨大な都市があったことが知られています。



その都市の崖の下がガリラヤ湖であり、「ガダラ」(ゲラサ)の港であったのです。だとすれば、「汚れた霊」と崖を駆け下りて死んだ多くの「豚の群れ」の出来事の説明もつくのです。

●イエシュアと関連する出来事の中で偶然に起こったものは何一つありません。イエシュアの宣教の本拠地であったカペナウムは「こちら側」であり、「ユダヤ人の地域」です。しかしイエシュアが行かれた「向こう側」は「異邦人の地域」なのです。つまり、「異邦人」の時が来て異邦人が救いを受ける時が終わると、再び「ユダヤ人」たちの救いの時が来るという「型」がここに啓示されていると言えます。



2. 悪霊につかれた人

(1) 「墓場」

●マタイはここで悪霊につかれた人が「二人」、墓場から出て来たと記しています。当時の墓場は岩に掘った洞窟であり、墓穴は犯罪者の隠れ場、極貧の人々、気が変になった人々の住処になっていたようです。現在でも古い墓穴は避難所や仮の宿として利用されているそうです。本来、「墓」は亡くなった人を覚える場所ですが、「向こう側」の「墓」は「汚れた場所」で、悪霊どもが住んでいると考えられていました。

(2) 「狂暴性」

●「彼らはひどく狂暴で、だれもその道を通れないほどであった。」とあります。マルコ 5:1~20 によれば、「悪霊につかれた」人というのは、足かせや鎖でつながれたとしても、鎖を引きちぎり、足かせをも砕いてしまうほどの力を持っていて、だれもそうした者を抑えるだけの力をもっていなかったのです。悪霊の力が働くと人は狂暴性を帯びます。それゆえ人々は悪霊の力を抑制することができずに、困惑し、危害を加えないように墓場に監禁したのです。悪霊につかれた人の状態は悲惨であり、自分を傷つけ、その人生を壊し、正常な社会生活を送れなくしてしまいます。人としての尊厳を奪われるだけでなく、死人同然にされてしまうのです。

(3) なぜマタイでは「二人」なのか

מתאי

●マルコ(5:1)やルカ(8:27)の並行記事によれば、「悪霊につかれた人」は一人で、しかも「レギオン」(当時のローマ軍団体の一単位)と呼ばれていました。なぜマタイはここで悪霊を追い出された人を「二人」としたのでしょうか。それはマタイの福音書がユダヤ人向けに書かれたことと関係しています。というのは、ユダヤ人にとって、ある出来事が真実であると確認されるためには、二人あるいは三人の証言を必要としたからです。

【新改訳 2017】申命記 19:15

いかなる咎でも、いかなる罪でも、すべて人が犯した罪過は、一人の証人によって立証されてはならない。二人の証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。

とあるように、イエシュアが「メシア」、「神の子」、「ダビデの子」であるという証言にしても、その証言が有効であるためには、二人以上の証人が求められました。そのためにマタイはイエシュアのメシア性を弁証するためにユダヤ的表現を用いたと考えられます。同様に、マタイ9章 27~31 節や 20 章 30~34 節に「二人の盲人のいやし」が出て来るのに対し、マルコ(10:46~52)やルカ(18:35~43)では、盲人は一人です。このような表現方法から、マタイがユダヤ人向けに対して書いたことが分かるのです。

3. 悪霊たちの反応

●さて、墓場にいる「悪霊につかれた」二人の者がイエシュアを「迎えた」とあります。ここにはギリシア語で「ヒュパンタオー」(ὑπαντάω)が使われています。単に「出迎える」という意味ではなく、戦うために、あえて反抗する意思をもって出向くという意味です。悪霊たちは墓に住んでいた狂暴な人を支配していましたが、イエシュアが自分たちを滅ぼすためにやってきたと直感し、イエシュアを迎え撃とうとして出てきたのです。「**すると見よ**」とあります。敵対する思いで出向いたにもかかわらず、「彼らが叫んだ」のです。つまり、「叫んだ」とは助けを求めて叫ぶことです。「神の子よ。私たちと何の関係があるのですか。まだその時ではないのに、もう私たちを苦しめに来たのですか。」

●興味深いことに、悪霊につかれた二人はイエシュアのことを「**神の子**」と呼んでいます。彼らはイエシュアのことを「神の子」と知って、その権威を恐れているのです。恐れているのは二人のように見えますが、真に恐れているのは彼らの内に住んでいる「悪霊たち」です。「まだその時ではない」の「その時」とは、神が定められた時(「カイロス」καίρος)で、イエシュアがメシアとしての王権を確立する時のことです。それは同時に悪霊たちが滅びる時なのです。その時が来れば、滅ぼされることを悪霊たちは知っているのです。そこで悪霊たちはイエシュアに懇願し、自分たちを「豚の群れの中に入れてくれ」と言ったのです。その理由は悪霊が「体」をもたない霊であり、いつも住む家を捜しているからです。ルカの並行記事では、悪霊どもはイエシュアに「**底知れぬ所に行けと自分たちにお命じにならないようにと懇願した**」とあります(ルカ 8:31)。そこは悪霊にとって恐ろしい刑罰の場所と知っているからです。そこでイエシュアは悪霊たちの願いどおりに彼らを豚の群れの中に入るのを許されたのです。こうして、豚の群れとともに悪霊たちも滅びたのです。

註

●イエシュアはしばしば悪霊を追い出されました。中には人の口をきけなくする悪霊がいました。悪霊が出ていくと口がきけなかった人がものを言い始めて、人々は驚いたとあります(ルカ 11:14)。パリサイ人たちはイエシュアが「悪霊どもを追い出しているのは、ただ悪霊どものかしらベルゼブルによることだ。」(マタイ 12:24)と非難しましたが、イエシュアは「わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。」(マタイ 12:28)と述べています。ちなみに、「わたしが神の御霊によって」とあるところを、ルカの並行記事では「わたしが神の指によって」としてあります。つまり「神の指」とは「聖霊」のことなのです。聖霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところ「来ている」ということを言っています。

●ここで「来ている」と訳された語彙は、ギリシア語では「すでに到着した」ことを意味する「フサノウ」(φθάνω)です。これをヘブル語にすると「触れる、近づく」を意味する「ナーガ」(נָגַע)のヒフィル態(使役態)が使われています。「近づく」と「触れる」とは本来微妙にニュアンスが異なりますが、ヘブル語においては全く同じ意味なのです。創世記 3 章 3 節に「ナーガ」(נָגַע)の最初の言及があります。アダムの妻エバは蛇に善悪の知識の木に「触れてもいけない」と言っていますが、「触れる」という言葉はその木に触れるためのプロセスとして「近づく」ことをも含んでいます。これはヘブル語が持っている「すでに」と「いまだ」を内包しているのです。

●こうしたことは、ヘブル語のもうひとつの動詞「カーラヴ」(קָרַב)にも見ることができます。この動詞は、限りなく「近づいている」という意味と、「すでにあなたがたのただ中にある」という意味を同時に含んでいます。バプテスマのヨハネも、イエシュアも、同じく「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と宣教を開始しましたが、この天の御国が「近づく」とは、同時に天の御国は「すでにあなたがたの中にある」とも言えるのです。日本語訳の場合は、この二つの意味を持つニュアンスを一言で訳すことができません。しかしヘブル語は、神のご計画における「いまだ」と「すでに」という時系列の緊張関係を表わすことのできる、まことに不思議な言語なのです。悪霊たちが「まだその時ではないのに、もう私たちを苦しめに来たのですか」と叫びました。つまり「定められた審判の時」ではないのにと言っています。しかしイエシュアの登場は「定めの時」がすでに来ていることを示しています。そのことが豚の群れの中に入り、悪霊どもが水の中で滅びた出来事に現されているのです。

4. どうして人は悪霊につかれるのか

●「悪霊」ということばは旧約聖書では 2 回しか出てこないことばですが、なぜ人が「悪霊につかれるのか」を説明しています。一つは申命記 32 章 17 節、そしてもう一つは詩篇 106 篇 37 節です。

【新改訳 2017】申命記 32 章 17 節

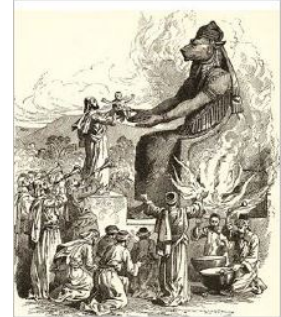
彼らは、神ではない悪霊ども(דְּמוֹנִים)にいけにえを献げた。彼らの知らなかった神々に、近ごろ出て来た新しい神々、先祖が恐れもしなかった神々に。

【新改訳 2017】詩篇 106 篇 37 節

彼らは自分たちの息子と娘を悪霊(דְּמוֹנִים)へのいけにえとして献げ

מתן

●上記の箇所を裏付ける歴史的出来事がイスラエルの歴史に、特にユダ王国の滅びを決定づけたマナセの時に起こりました。マナセの行った偶像礼拝の一つに「自分の子どもに火の中を通らせ」(Ⅱ列王記 21:6)というのがあります。これは幼児の人身を犠牲として祭壇で焼く異教的な宗教習慣で、一般にはモレクの神へのささげ物と考えられています。この残虐な「忌み嫌うべき慣わし」は、マナセの祖父であるアハズもしています(Ⅱ列王記 16:3)。他にも、マナセはト占^{ほくせん}をし、まじないをし、霊媒^{ないはい}や口寄せをして、主の前に悪を行ない、主の怒りを引き起こしました(Ⅱ列王記 21:6)。



●「悪霊につかれる」ということは、「悪霊どもにいけにえを献げた」ことでもたらされます。つまり、人生の中で偶像の神々を拝むことによって、悪霊の侵入口を持つことです。つまりその人がなんらかの偶像に対して、たとえばニューエイジやコックリさんとか、占いとか霊媒とかオカルト的な事柄に対して、「意識的に心を開く」ことなしに「悪霊につかれる」ことはありません。神を忘れ、故意に神以外のものに、すなわち偶像に心を開くとき、悪霊に支配され、「悪霊につかれる」のです。逆に、もし人がサタンに誘惑されながらもそれに従うことを拒むなら、サタンが成し遂げようとしていることは起こりません。悪霊にしても、人の同意なしには何もできないのです。悪霊に対して、意識的な招きをした者だけがそれに支配されるのです。あるいは、前の世代から代々受け継いできたものを通して「悪霊につかれる」のです。その場合、のろいに基づいて悪霊に支配されます。例えばイエシュアが十字架にかかる時、ユダヤ人が自分たちにかけたのろい、すなわち、「その人の血は、私たちや子どもたちの上にかかってもいい」(マタイ 27:25、第三版)というのがそうです。この種ののろいはイエシュアによって全く新しい存在とされない限り、解放されることはありません。

5. 豚を飼っていた者たち

●墓場からずっと離れた所に、たくさんの豚の群れが飼われていました。その群れが水におぼれて死んだことで、飼っていた者たちは逃げ出して町に行き、悪霊につかれていた人たちのことなどを残らず知らせたとあります(33節)。しかし悪霊から解放された二人が正気に戻ったことやイエシュアがメシアだということ、さらには、今後は町が安全になることについては正確に伝えなかったようです。豚を飼っていた者にとっては、むしろ豚を失ってしまったことの方が問題で、事の重要性よりも目先の損失だけに心奪われて、自分の被った損害だけを数え上げる人たちです。このことは、当時も今も変わりません。

●マタイは常套句^{じょうたうく}である「すると見よ」を使って、町中の人々が豚を飼っていた人から何を聞いたか、その点に注目させようとしています。つまり、イエシュアに「その地方ら立ち去ってほしいと懇願した」のです。つまり、豚の損失事件のような被害だけはもたらしてほしくなかったのです。イエシュアがもたらす神の恵みには目を閉ざし、失われるものだけに心が奪われる、そんな愚かさを暴露しているのが、異邦人の人々の姿でもあるのです。イエシュアこそ真の王(メシア)であり、すべての人の主であられることが知られるように、主の弟子として、祈り続けて行きたいと思います。

2018.6.3